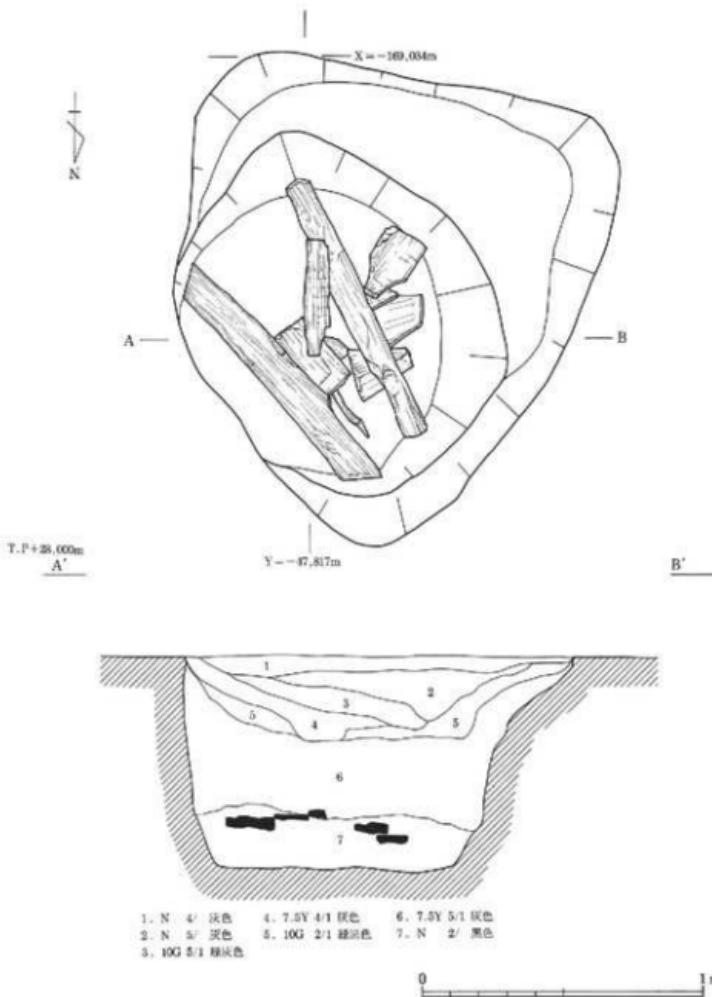
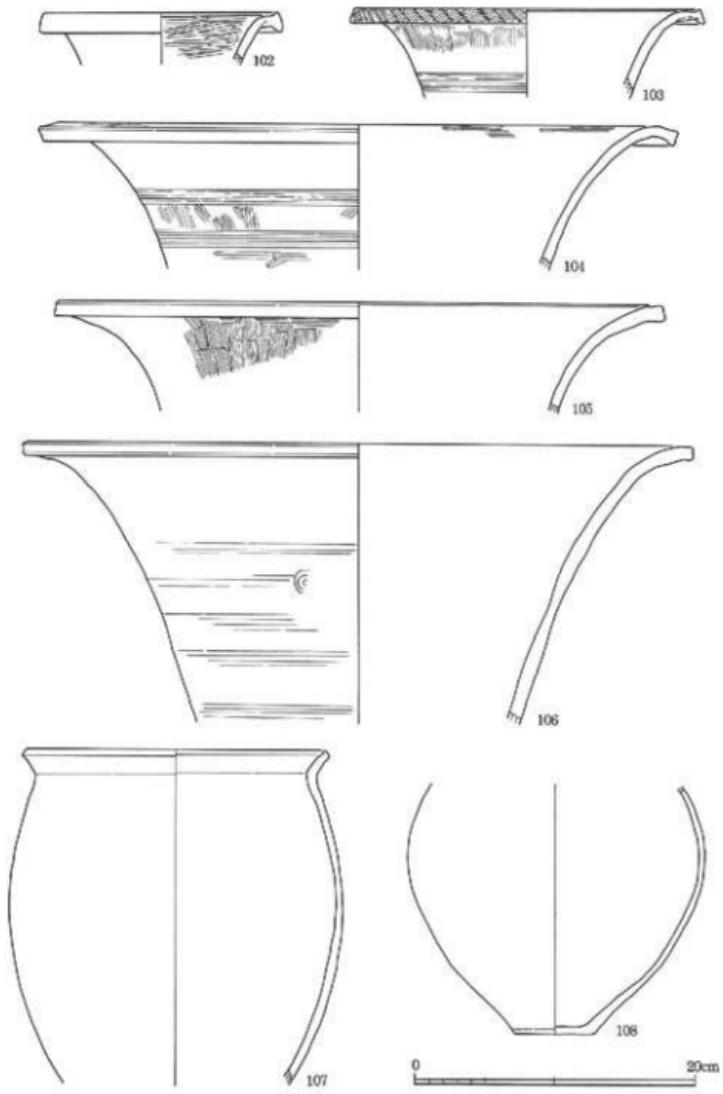


(106) cmまであり、口縁端部は面をもっておわるが、わずかに上下を拡張するものもある。113・104・106の頸部には櫛推直線文がある。113は11条、104は7条、106は摩滅のた



第48図 132-OO平・断面図 (I-C)



第49図 132-〇〇出土遺物 (I-C)

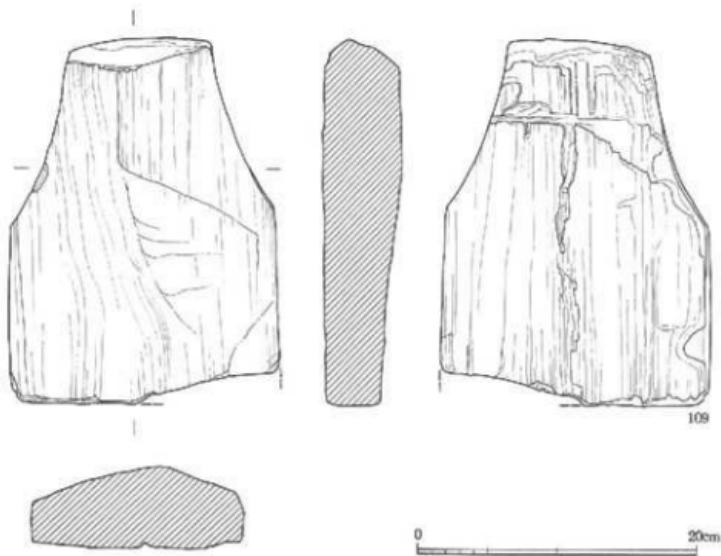
め判然としないが5連を施し、一部、擬似流水文らしきものがある。櫛描文としては他に、上下に広げた口縁端部に波状文を施す103がある。

外面調整は、103・107にハケメ、104・105にヘラミガキ、108がヘラケズリを施す。内面は102がヘラミガキ、103・104・107がナデを施す。色調は灰黄色を基調とする。

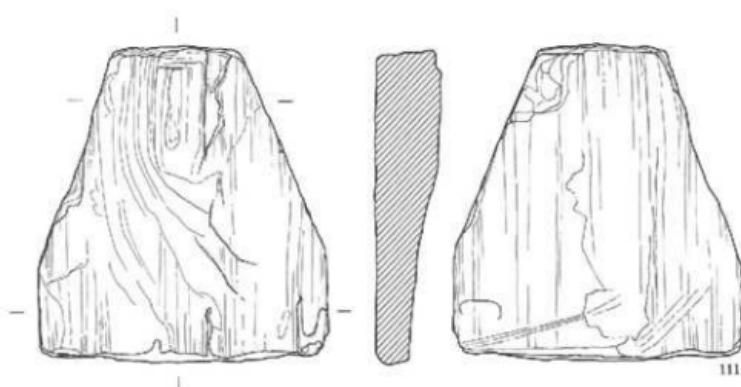
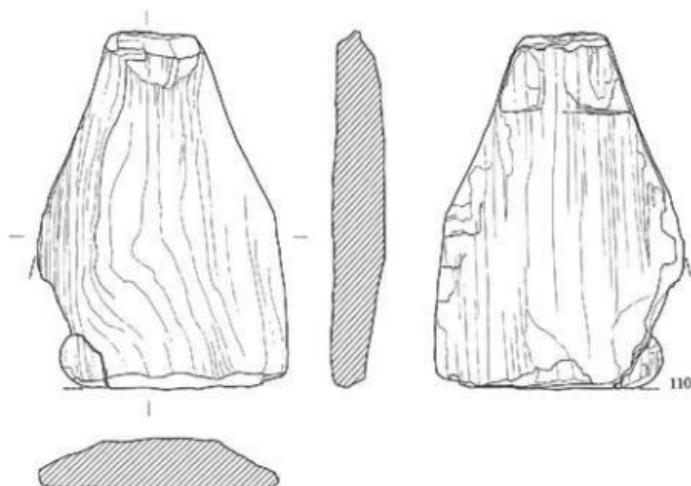
以上の特徴から、これらは畿内第II様式末～III様式はじめごろと考えられる。

木製品（第50～52図、図版67・68）

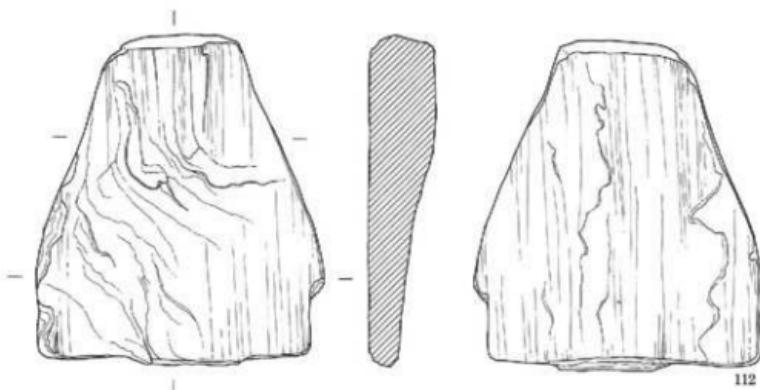
広歿未製品はいずれも直柄式のもので、幅16.9（110）～21.2（113）cmの板材を22.5（111）から26.1（109）cmの長さに切断し、頭部の輪郭をつけるために上部両端を斜めに切り落として外形をつくる。いずれも片面は平らで、もう片面の頭部付近を厚いもの（109）で5.7cmの厚みをもたせることで山形に突出させ、柄穴の隆起に備えているが柄孔は穿たれていない。また、109・110・113の平らな面には、上端から4～6cm下方で横方向に溝と段をつけて、泥除け装着の段を作り出す。現状の重さは、109が1500g、110が830g、111が1010g、112が990g、113が930gを計る。



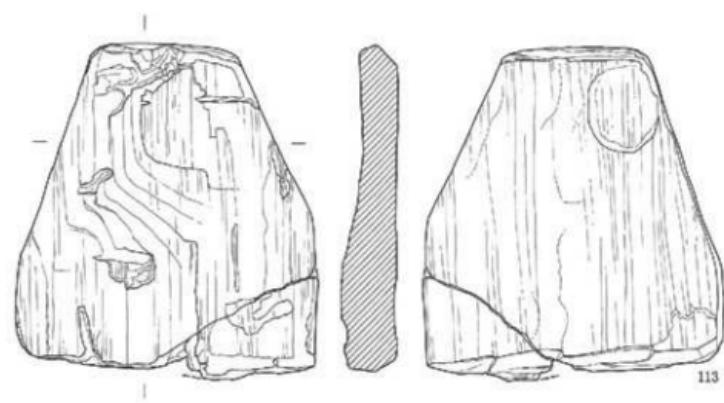
第50図 132-00出土木製品（1）（1～C）



第51図 132-00出土木製品 (2) (1-C)



112



113

0 20cm

第52図 132-〇〇出土木製品 (3) (1-C)

2. 弥生時代後期

弥生時代後期の主だった遺構としては、中期の113・139-OSの東側に溜まり状になつた溝55-OSがある。

55・56・138-OS (第53図、図版35・36)

その1・C地区、その2・C地区で、大溝113・139-OSの北西を一部切った溝である。55-OSと138-OSは同一で、一方56-OSはやや方向を変えて途切れるが、三者は一連のものと解釈できる。55・138-OSは幅が1.4~4.5mと安定せずに蛇行する不明瞭なものである。断面は、南東半がU字形を、最も広くなった北西部は逆台形を呈し、溝底も安定しない。堆積土は上層が灰褐色、下層がオリーブ褐色で、深さ0.4~0.8mで南東側に下降する。おそらく、西に張り出した微高地を横断、掘削することはせず、南の低地に向かって低くしたのである。このことは56-OSが一端2.1m途切れ、しかも北西に56-OSが位置するにもかかわらず、長さ6.3mのところで幅5.2mまで広がり、逆方向に下降することからも分かる。

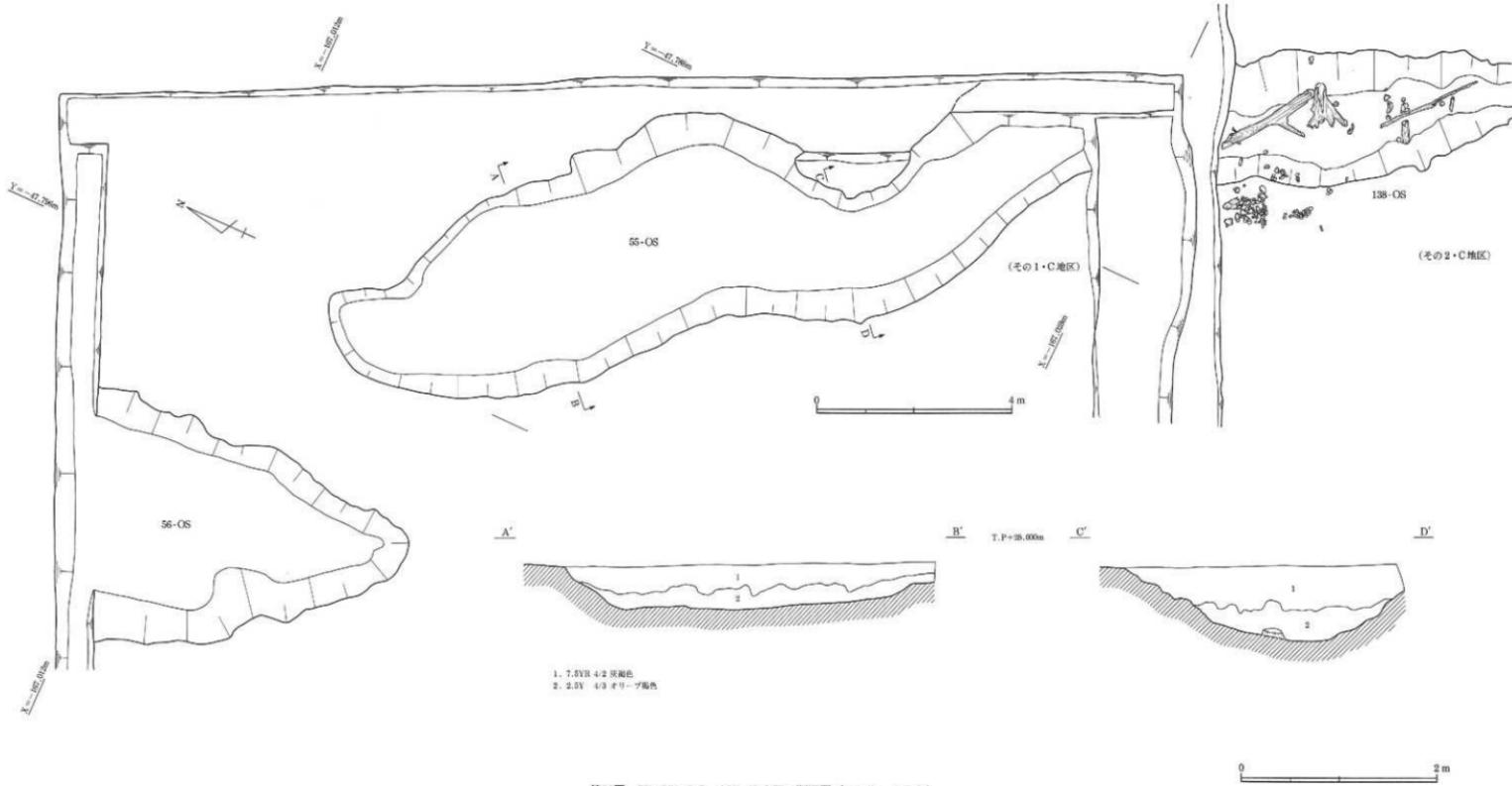
55・56-OS、138-OS出土遺物 (第54~57図、図版56~57)

55-OS出土遺物 (第54図、図版56)

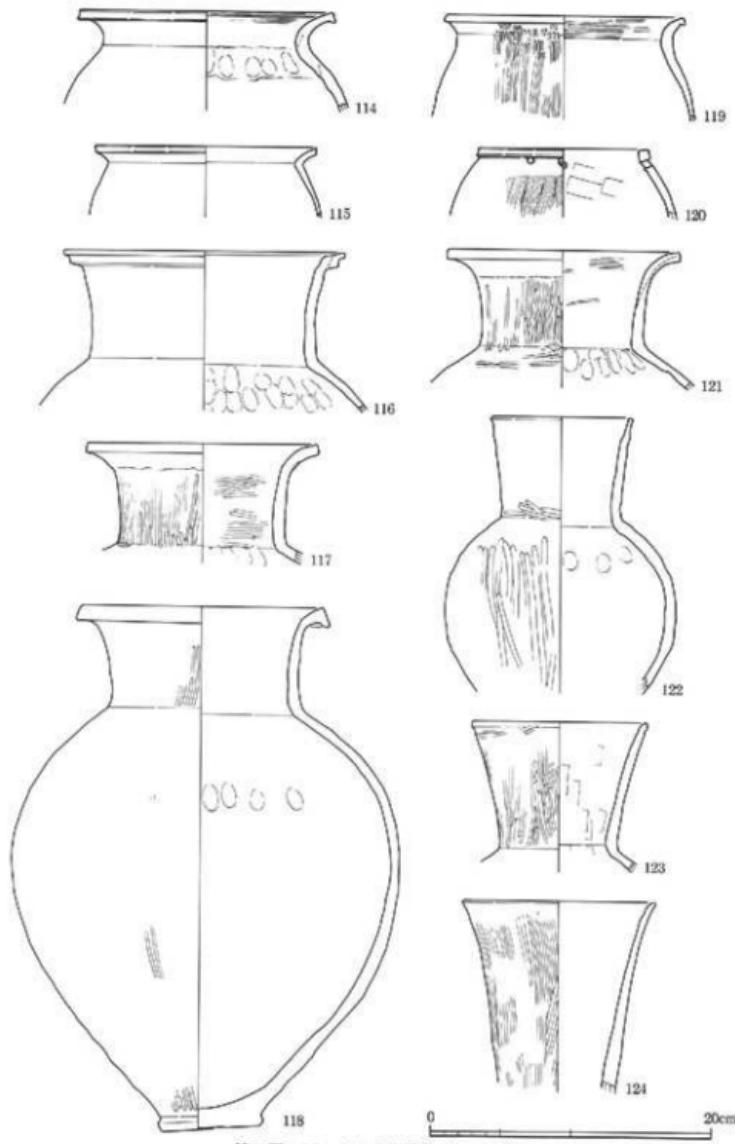
壺形土器が主体的であるが、甕形土器も出土する。

壺形土器は114・115・119である。いずれも口縁部はくの字に折れ広がり端部は面をもち下方に心持ちつまみ出す傾向がある。114は頸部が非常にしまる。調整は119の外面にタキメ、内面には口縁部にヨコハケメがある。口径は15.8~18.3cmの間にある。色調は灰黄色を基調とし、胎土は緻密である。

甕形土器は120を除いて、いずれも頸部がわずかに外方に広がりながら立ち上がる。口縁部は短く外方へ水平方向に広がる116・118・121とそのまま直口する122・124がある。口縁端部は面をもつのが基本だが、上端を水平方向につまみ出す116、下方に拡張する118が特徴的である。外面調整は頸部に縦方向のヘラミガキを施すのがほとんどである。121には体部の最も頸部側、123の口縁部に、122は口縁部と体部の屈曲部に横方向のものがある。また、124はタテハケメがある。内面は基本的にはナデであるが、117・121にはヘラ



第53図 55・56-OS、138-OS平・断面図 (1-C、2-C)



第54図 55-O S出土遺物 (1-C)

ミガキがある。

これらの中でも異質なのは、120の無頸のものである。丸みをもった体部に短く立ち上がる口縁部がつく。断面逆L字状に外方に極めてわずかに屈曲して突出する。そのすぐ下には2孔一対の径5mmの孔が穿たれる。外面肩部に1単位8条のタテハケメ、内面はヘラケズリを施す。色調は灰黄色を基調とし、118・122・123が褐灰色かがる。胎土は117・118・121・122がやや粗く、他は緻密である。

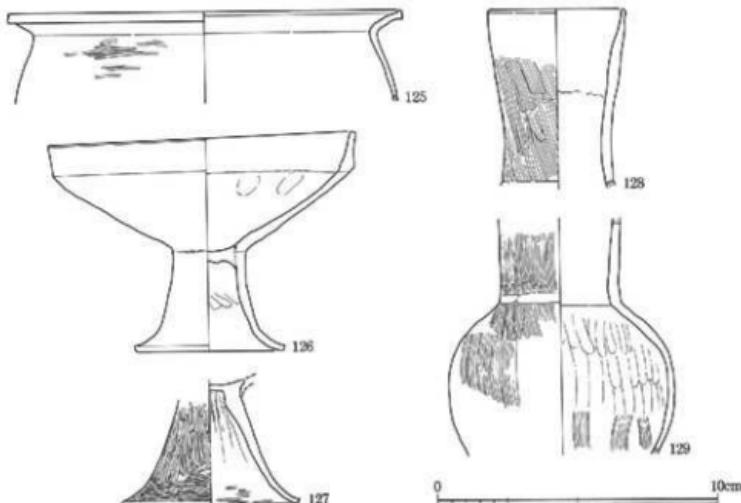
時期は畿内第V様式前半である。

56-O S出土遺物 (第55図、図版56)

これには壺・高杯・壺形土器がある。

125の壺形土器はくの字に屈曲する口縁部で、端部はやや下に拡張気味である。外面にヘラミガキ、内面にナデを施す。

126・127は高杯形土器で、脚部は短くゆるく広がり、裾付近で大きく広がる。端部に面をもち、上に拡張気味につまむ。126には杯部が残り、体部と口縁部に明瞭な屈曲部をもち、口縁部は垂直に立ち上がる。127の杯部内面、脚部外面、脚裾部内面に細かいヘラミ



第55図 56-O S出土遺物 (1-C)

ガキを施す。

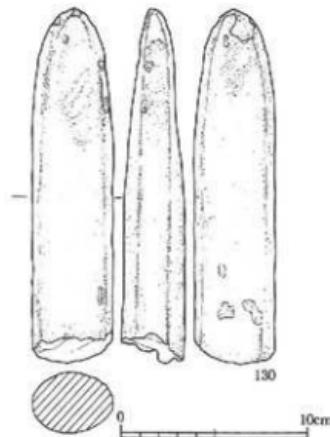
128・129の壺形土器は球形の体部にまっすぐ長く立ち上がる口縁部をもつ。外面は全体にタテハケメを施す。129の体部内面には縦方向のユビナデの後、タテハケメを一部施す。

色調は灰黄・黄灰色を基調し、125はやや暗い。胎土は127が緻密で、他はやや粗い。時期は55-O Sと変わらない。

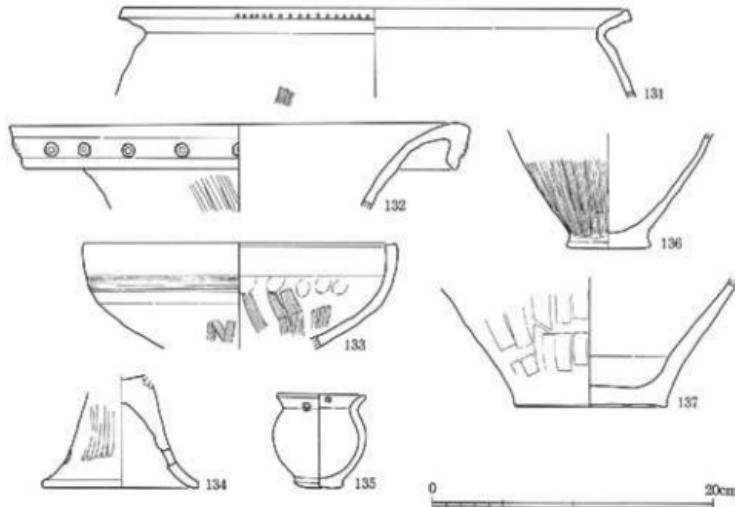
138-OS出土遺物 (第56・57図、図版57・66)

出土遺物には石器と甕生土器がある。

図56にある130は結晶片岩製の先端が尖り気味の石棒状の石剣で、断面は橢円形状を呈する。残存長18.70、幅4.27、厚み3.36cm、重さ450gをはかる。



第56図 138-OS出土石器 (2-C)



第57図 138-OS出土遺物 (2-C)

図57に示す弥生土器には、壺形、壺形、高杯形土器がある。

131の壺形土器は口径36.0cmの大形のもので、くの字の折れる口縁部をもつ。端部はわずかに上下に拡張し、下端に刻み目がつく。調整は体部外面にハケメがある。

壺形土器には口径32.8cmの大形の132と口径6.2・器高6.6cmのミニチュアの135がある。

132はラッパ状に広がる口頸部に垂下する口縁部がつく。端面には径10mmの円形浮文があり、頸部外面にハケメを施す。135は頸部のしまらない、くの字の口縁部をもつ。頸部から口縁部にかけて外方から穿った径5mmの孔があく。ヘラケズリとナデで仕上げ、端部は丸く、平底の底部も丸みをもつ手すくねのものである。

133・134は高杯形土器である。133は椀形のもので、口縁端部はやや内面に傾き、内方にわずかにつきだす。内外面ともハケメを施す。134の脚部は短いものでしまりのない脚柱部からゆるく外湾する裾部をもち、その境に円形の透かしを穿つ。

底部は136が鉢形か壺形か判然としないが137は底径10.6cmの大きさから壺形土器と考える。双方とも斜め外方に向かって直線的に立ち上がる体部であるが、137は底部下周囲が外方に突き出で踏ん張った器形を呈する。調整は外面が136はハケメ、137はヘラケズリ、内面は双方、ナデを施す。

時期は55-O Sと変わらない。

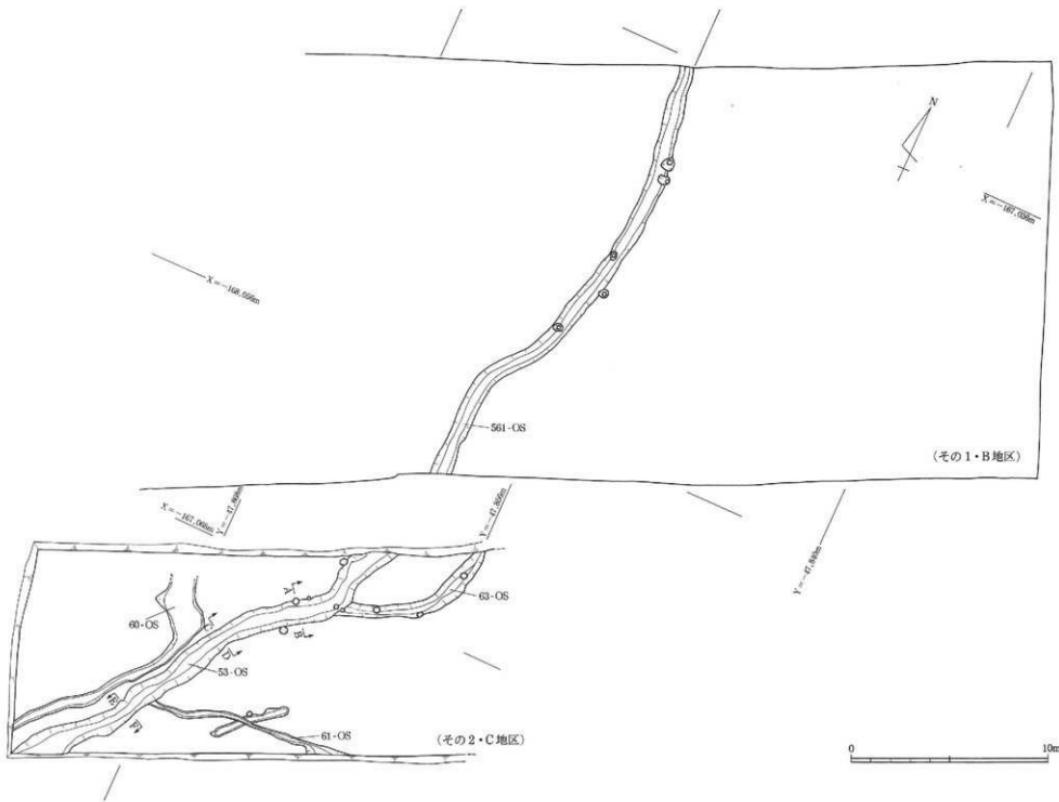
3. 飛鳥時代

561・53・60・61・63-O S (第58~59図、図版37)

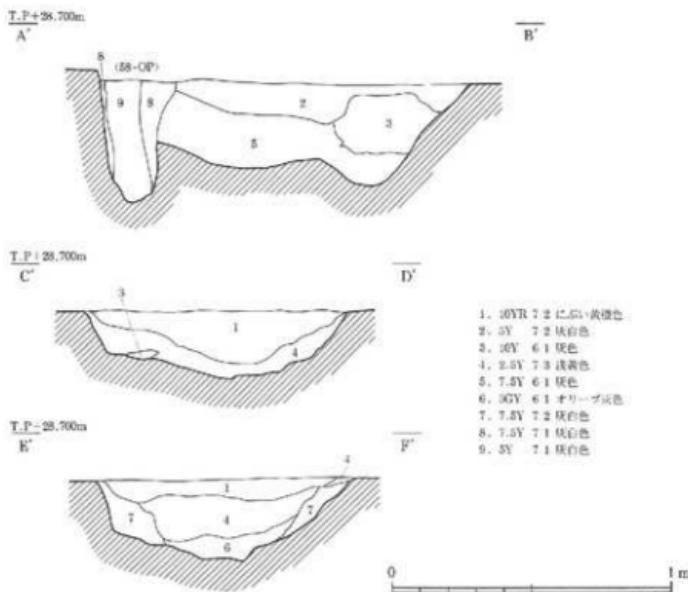
その1・B地区とその2・C地区において検出した弥生時代中期の自然流路上で、やや東に傾き、北方向に向けて緩やかに蛇行、枝分かれしながら下降する溝群を検出した。

うち、溝群の中では最もしっかりと安定して調査区を貫くのは溝53-O Sである。これは幅0.6~1.5m、深さ0.3mのもので、断面形U字形ないしは逆台形を呈し、堆積土は灰色、黄色の色調である。

これに切られ、古いと考えられる溝は幅1.0mの溝63-O Sであり、弧状を描く。また、唯一東西方向に向くのは幅0.3mの小溝61-O Sだが、溝53-O Sとの切り合は不明瞭である。しかし、灰色粘質シルト系の堆積土との関係から、溝53-O Sの西側に沿って平行する不安定な溝60-O Sと一連となる可能性がある。



第58図 561-OS、53・60・61・63-OS 道構配配置概略図 (1-B、2-C) (1/200)

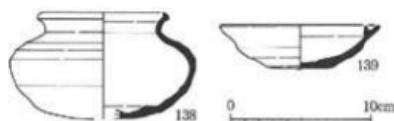


第59図 53-O S断面図 (2-C)

この辺りで溝が枝分かれし不安定になるのは、南側から流れる和田川が今回の調査区の南側500m付近から大きく西にふれる。そこから導水し、ちょうど調査区の西側で東にまた向きを変え、その南方で和田川と接近すると考えられる。また、それとともに調査区辺りから西に開く谷とも合流する可能性もあり、調査区辺りで、こうした複雑性を示すのであろう。

53-O S出土遺物 (第60図)

溝53-O Sから出土した遺物には須恵器の杯身、短頸壺がある。前者は口径10.6cmと小さく、かえりが身に短くつき底部は平底風で、回転ヘラケズリが残る。後者は口径8.6cmで、短く大きく外湾し、端部上下に拡張する口縁部がつく。7世紀前半に属する。



第60図 53-O S出土遺物 (2-C)

4. 平安時代後期

平安時代の遺構としては、その1・B地区からその2・C地区にかけて建物群があり、計4棟が集合し、後期に属する。

1～3・77-O B (第61～67図、図版38～42)

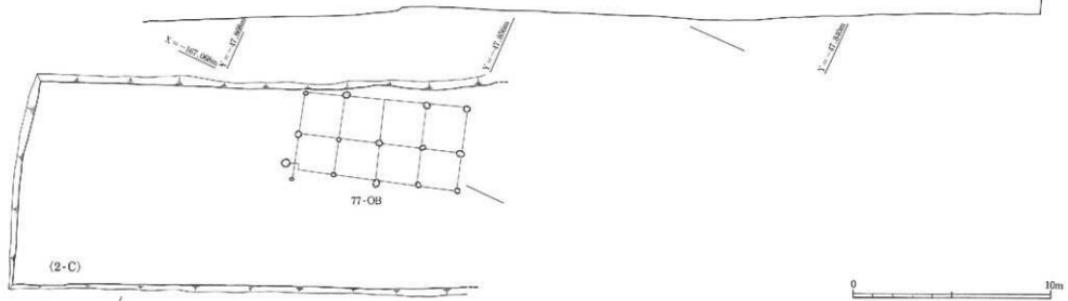
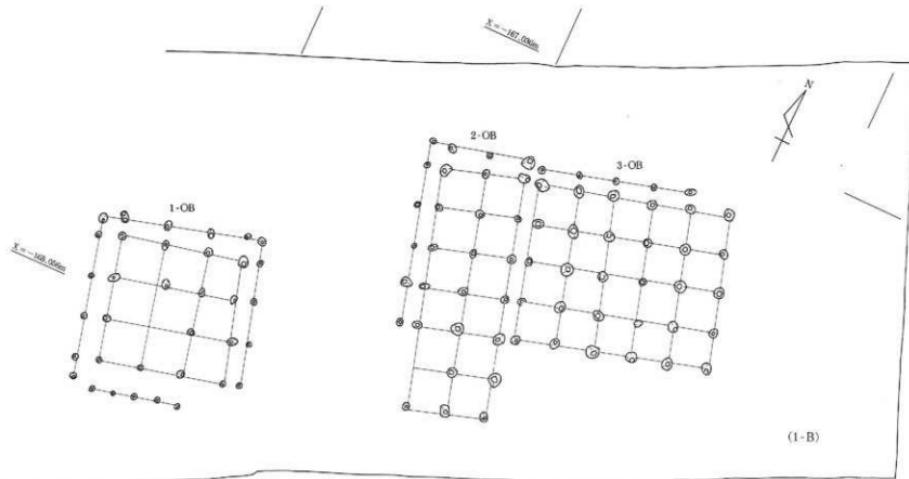
その1・B地区からその2・C地区にかけて建物群を検出した。これらは全体に西に15°ほどふれるが、その立地する地点を含めて幅100、長さ400mの南北に、これも西に15°ほどふれた長い方形区画らしきものが現地形から読み取れなくもない。仮にこれを認め、今回の調査区にあるような屋敷地が広がるとするならば、その区画の北端に位置することになる。つまり、押丘陵の西側で舌状に貼り出した地点にそって和田川は西に大きく蛇行するが、その貼り出しを整備し、川近くに設けた区画に屋敷が立ち並んでいたことになる。

建物群は4棟で構成され、その軸を共にする。うち、2-O Bと3-O Bは接し合い、同時に併存していたかどうかは疑わしい。しかし、掘方内の出土遺物を見るかぎりは極端な時間差はない。また、全体的には1-O Bと東側にある2-O B南端の柱が通り、身舎どうしは9.2m離れ、同様に1-O Bと南側の77-O Bは9m離れる。こうしたあり方を見ると、東側の3-O Bが2-O Bから増設された可能性も存在する。

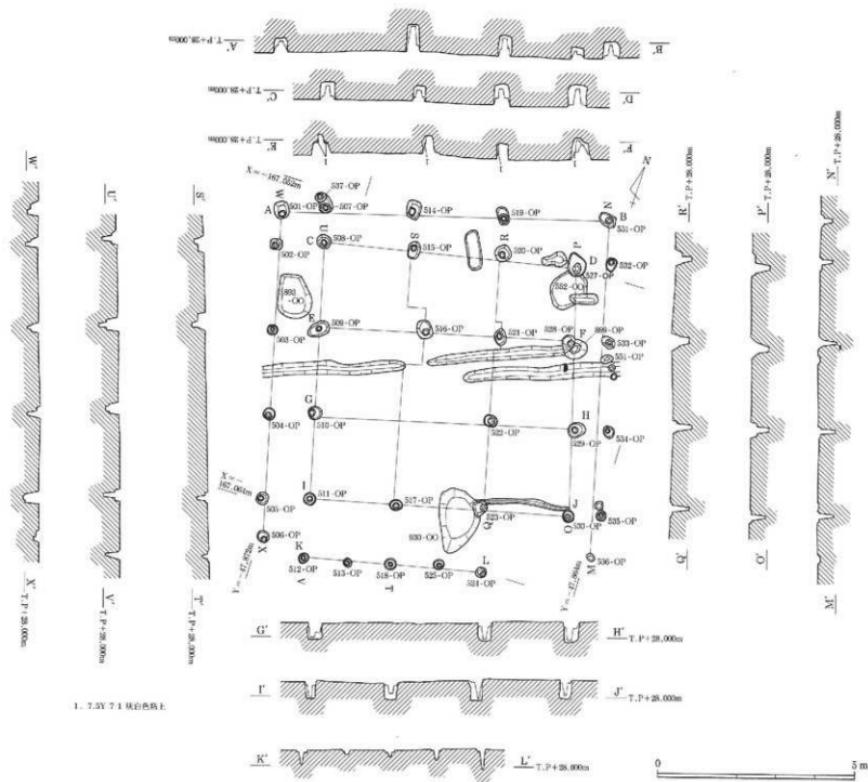
1-O B (第62図、図版38・40)

その1・B地区の3棟の中では西に位置し、軸はN-13°-Wと西にふれる。3間(6.3m)×3間(6.3m)に4面庇がつく。建物は北半が不ぞろいで、南西側の東柱を検出し得なかつたが、総柱の建物と考える。庇の柱間は基本的には建物の柱通りの延長にある。しかし、建物からの離隔が1.0m前後、南面は1.5mと不充分な分だけ、それぞれの隅柱との間隔がせばまる。また、南側は西半が半間ごとに柱が並ぶが、その代わりに東側が1間分開く関係にある。

柱の掘方は不整円形の径0.25～0.5m、灰白色粘土を埋土とし、深いもので0.7mとしっかりとしたものだが、南側の庇列はその隅柱以外、浅くなる。



第61図 1～3、77-OB 造構配置概略図 (1-B、2-C) (1/200)



第62図 1-O B平・断面図 (1-B)

2-O B (第63図、図版38・39・41・42)

その1・B地区の3棟中で中央に位置し、南北軸はN-16°-Wと西にふれる。6間(12.2m)×2間(4.2m)に北・西の2面庇がつく。総柱で、南北に長細い建物である。庇の柱間はこれも基本的には柱通りの延長にあり、離隔は1.0mほどと不充分な分だけ、隅柱との間隔がせばまる。

柱の掘方は不整円形の径0.25~0.6mであるが、方形のものもある。深いもので0.45mとしっかりとしたものである。庇の掘方は全般に浅い。

3-O B (第64図、図版38・39・41・42)

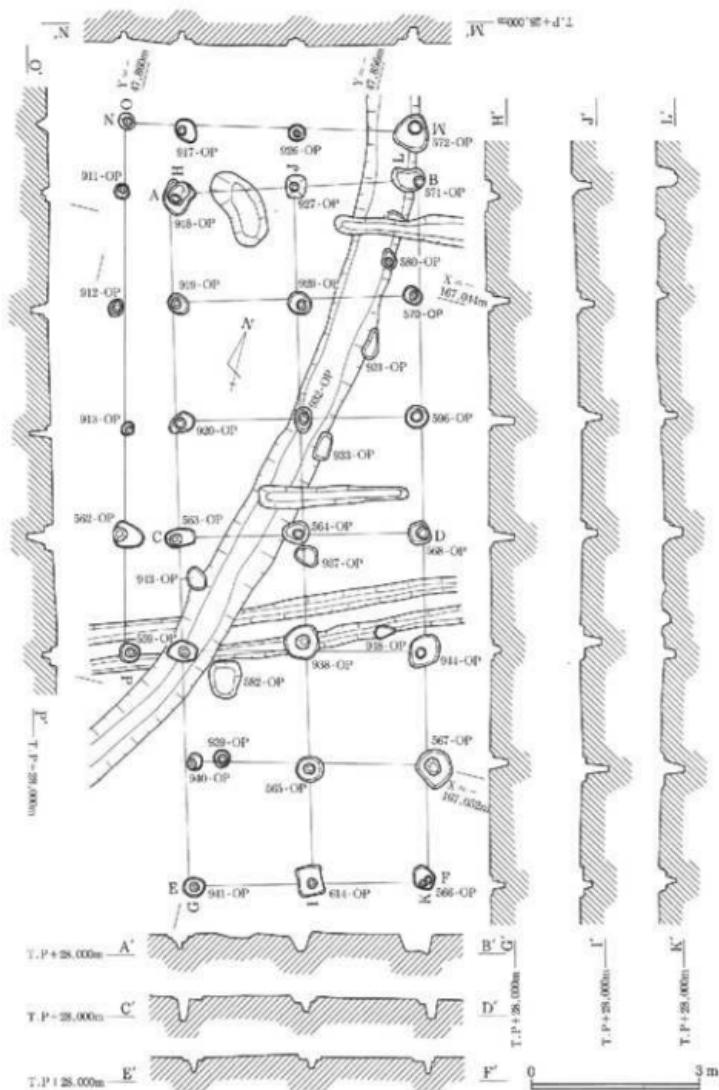
その1・B地区の3棟中で東に位置し、南北軸は2-O Bと同じである。5間(9.8m)×4間(7.9m)に北面に庇がつく。総柱の東西建物である。庇の柱間は基本的には身寄の柱通りの延長にあり、離隔は0.7mである。

柱の掘方はにぶい黄色・黄灰色・灰白色・灰色粘土を埋土とし、不整円形の径0.25~0.7m、深さ0.25~0.7mのもので、庇列は総じて幅0.3m前後、深さ0.3mと小さい。

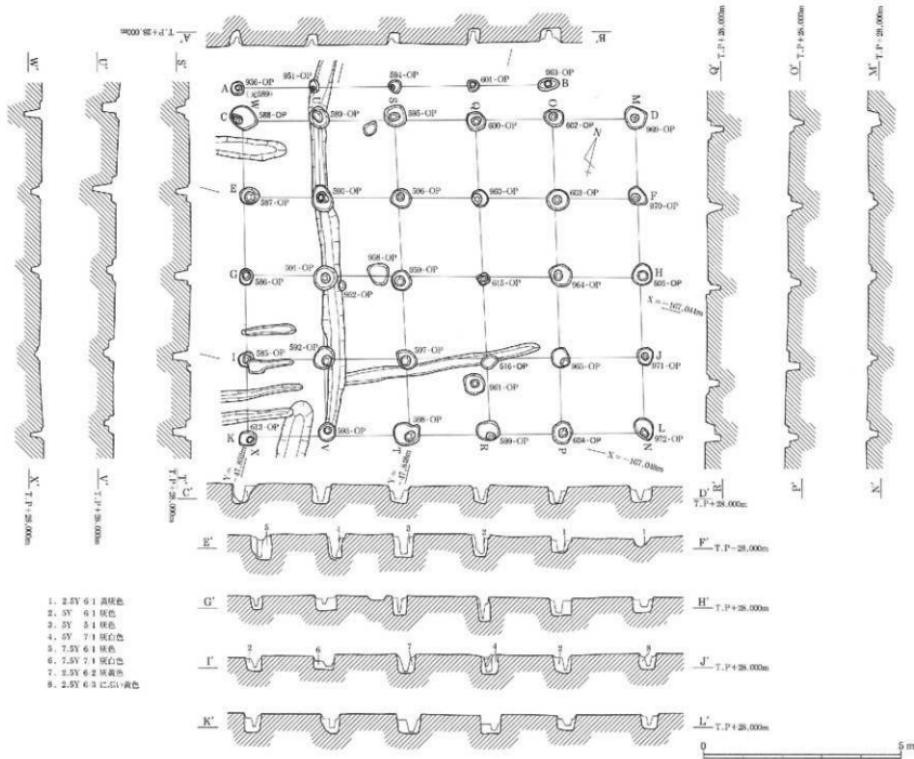
建物群ピット出土遺物 (第65・66図、図版57)

各建物の柱掘方から瓦器椀と土師器羽釜、瓦が出土する。1-O Bからは140・141、2-O Bからは142、3-O Bからは143~146が出土する。瓦は3-O Bの心柱の位置からである。

瓦器は口径12.0cmの小形の140と口径13.3~18.3cmの大形の142~145がある。小形のものは比較的大きく外反する体部に直立気味の口縁部がつき、他に比べて厚手である。大形のものは、いずれも内湾しながら立ちあがる体部にやや外湾して外方に開く口縁部がつく。底部には高台がつき、141は径5.2cmの断面三角形であり、144・145は径4.75・6.65cmのしっかりした断面台形のものがつく。器高は全体の分る144・145で、5.25・5.9cmを計る。器高指数は、35と38であり、後者は比較的高い値である。調整は140の内面、142の内外面にヘラミガキがあり、特に後者はていねいである。他はナデが全体に認められる。色調は141の明黄褐色、144の淡黄色の他は灰色を基調とする。



第63図 2-O B平・断面図 (1-B)



第64図 3-0 B平・断面図 (1-B)

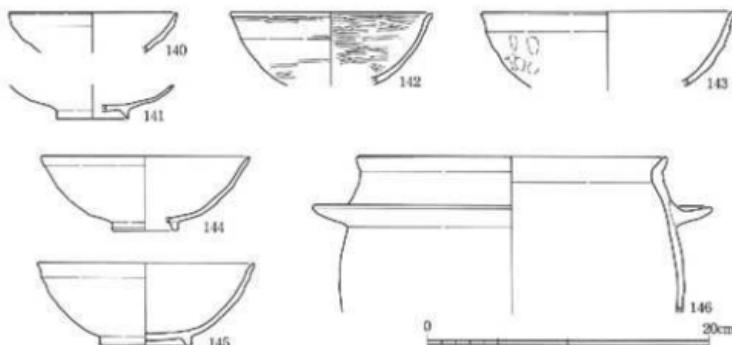
146は羽釜形土器で、灰黄色を呈する土師質のものである。口径22.2cmのゆるく、くの字に外反する短い口縁部である。球胸気味の体部の肩部に内にゆるく反った鶴をもつ。

以上の瓦器と土師器は12世紀前半ごろと考えられる。

瓦は147-1・2の埠状のものである。3-O Bの柱穴内からの出土である。柱の抜き取りの後か、建物存続中の柱の根グサレに伴うものかは、判然としない。

147-1は幅31.9、現存長14.5、厚さ5.2cmの大きさで、両縁にはケズリを認めることができる。

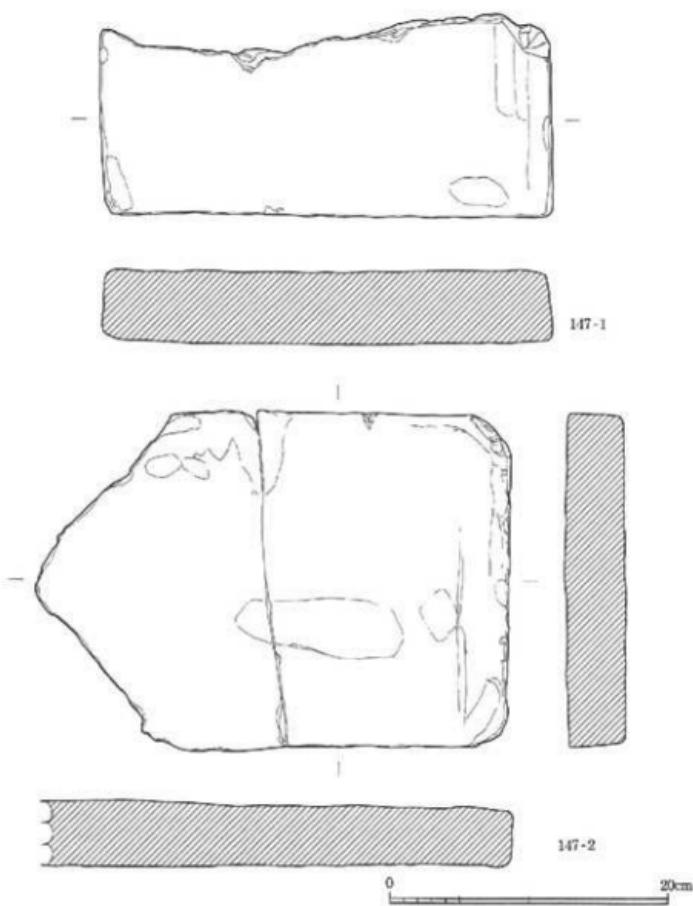
147-2は幅27.3、現存長33.6、厚さ4.6cmの大きさである。胎土は两者とも6mmの茶色粒を含むやや粗いもので、色調は灰を基調とする。



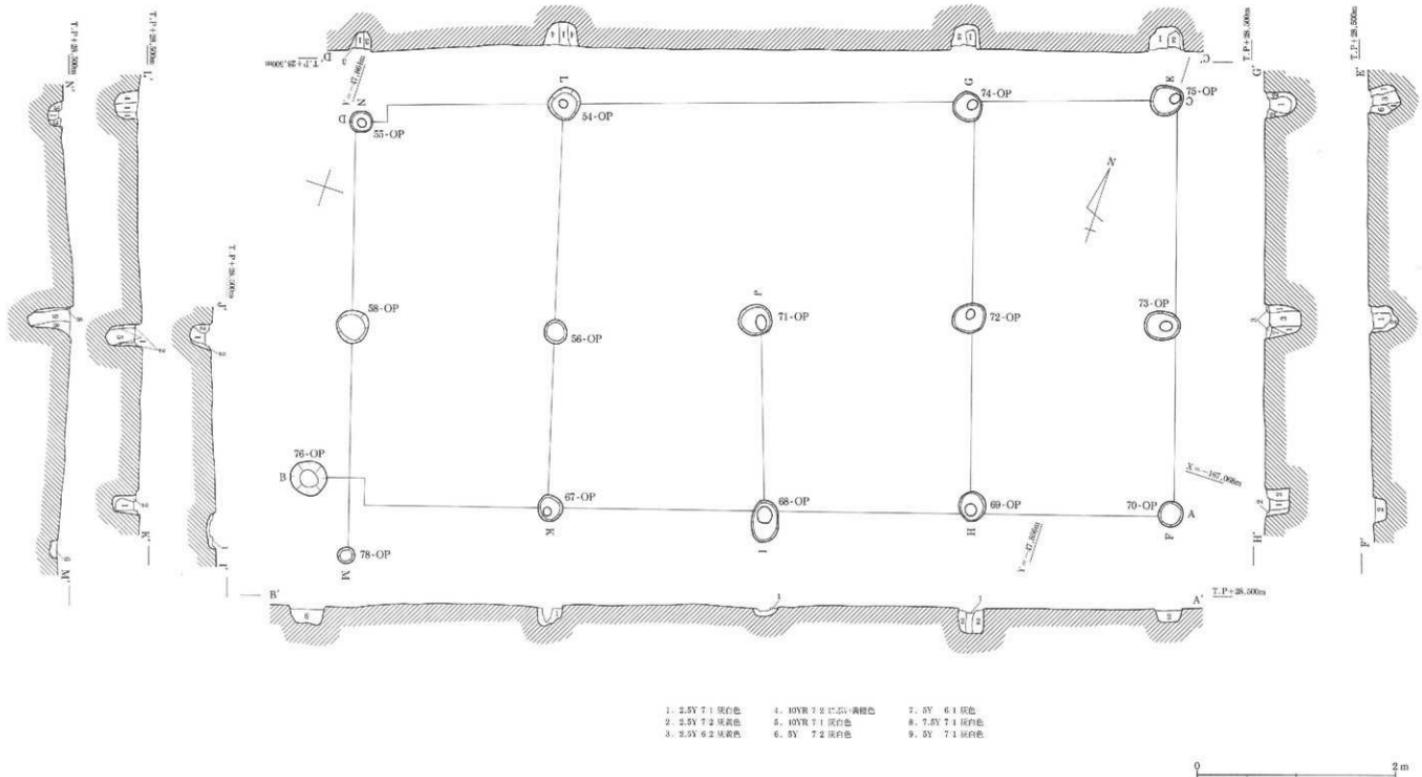
第65図 527・570・602・588・604・605-O P出土遺物(1-B)

77-O B (第67図)

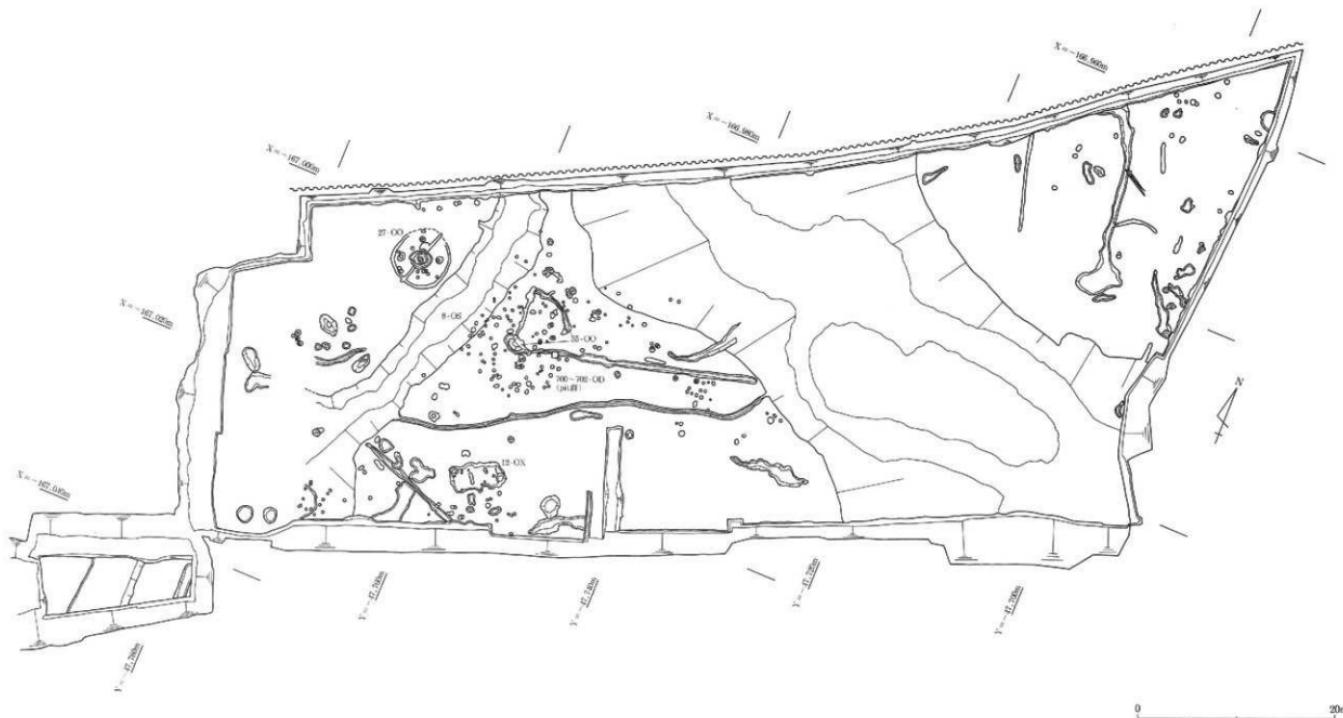
その1-B地区の3棟中で中央に位置し、南北軸はN-18°-Wと西にふれる。4間(8.2m)×2間(4.2)の総柱で東西方向の建物である。総柱の南北に長細い建物である。柱の掘方はにぶい黄橙色・灰黄色・灰白色・灰色粘土を埋土とし、不整円形の径0.15~0.4m、深さ0.1~0.5mのものである。



第66圖 616-O P出土遺物（1-B）



第67図 77-O B 平・断面図 (2-C)



第68図 野々井遺跡その6遺構配置概略図 (1/400)

第4節 その6の調査

第1項 調査概要 (第68図、図版43)

野々井遺跡その6の調査区は東側にその3、西側をその1・2にはさまれた地点で、泉北丘陵の尾根の縁辺部分に位置すると思われる。調査区の東側は中央部で検出された自然流路に向かって、丘陵より南西方向になだらかに傾斜しているが、住宅建設時の地形の削平や擾乱を多く受けているため良好な遺構は検出されなかった。多くの遺構はやや西側で、丘陵から舌状に延びる微高地の先端部分と思われる地点で検出された。しかし、この舌状に広がる微高地は調査区の南側より派生するものであるが、近現代の耕作地造成などによる削平と盛土が繰り返し行われてきたため旧地形の確認はできなかった。

調査地の標高は北東側がT.P約30m前後、西側で29m前後の地点である。調査では堅穴住居跡・土坑・溝・ピット・自然河川などがある。

その6の調査では調査区を2分割しておこなったが、本報告書では統合して報告する事とした。本書では本文や各図の表記には調査時点の遺構番号を使用した。

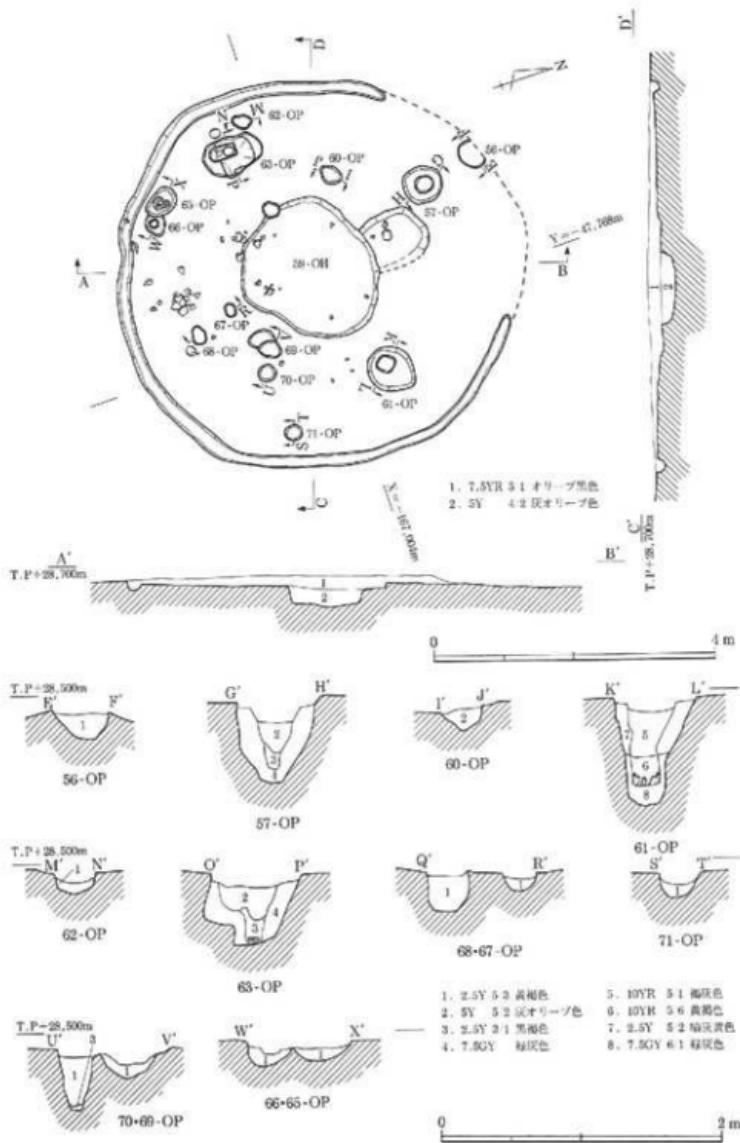
第2項 遺構と遺物

27-O D (第69・70図、図版44)

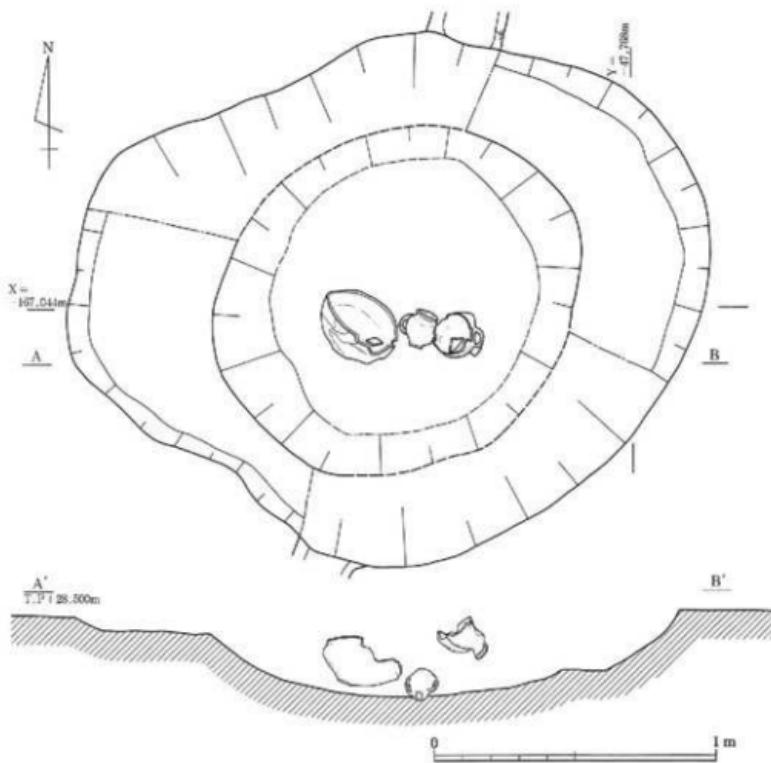
調査区北西で検出したやや小型の住居跡である。遺構は地山面(青灰色)から切り込んでおり径5.8mの平面プランを持ち、床面積25m²前後のものと思われる。住居跡は上部が後世の削平で10cmも残っていない。埋土はオリーブ黒色土である。全体的に住居跡はやや北側に傾斜し、周壁溝は幅15cm前後、深さ10cm前後を検出する。

屋根を支える主柱は中央部の径60cmほどの掘形をもつ4本(57・61・63・70-O P)が考えられる。それぞれは50~75cmと他のピットより深くなっている。ピットの埋土は黄褐色が多いが、深いものの掘方は緑灰色、柱根部分は灰オリーブ・黒褐色・褐灰色・黄褐色と様々である。また、61・63-O Pの柱根では木質が残る。

炉は土坑59-OH(第70図)が相当し、住居跡の中央部で確認され、長径2.3、短径1.85mの長円形で深さ30cmをはかる。下層より土器が出土する。



第69図 27-OD平・断面図



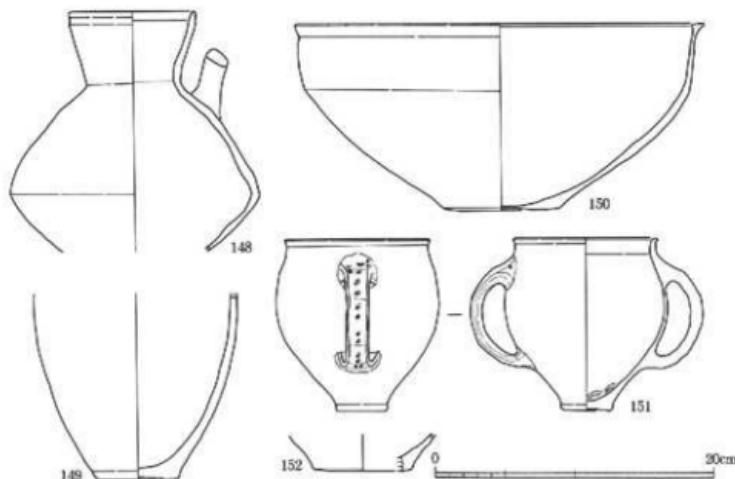
第70図 59-O H平・立面図

27-O D出土遺物 (第71図、図版58)

出土土器には水差形、變形、鉢形土器がある。

148の水差形土器は、口縁部に1条の凹線文がつく口径8.7cmのもので、口縁端部は丸くおさめる。やや短めの頭部に算盤玉様の体部である。体部肩上部に横方向の断面方形、U字形の把手がつく。149は寸胴の底径10.3cmと大きいやや上げ底気味の底部がつく變形土器である。外面はヘラケズリ、内面はナデで仕上げる。

150は口径29.0、器高13.2cmの大形の鉢形土器である。薄く径8.4cmの大きな平底の底部と、上部で屈曲して垂直に立ちあがる口縁部をもつ。口縁端部は平たく内外方に拡張し、



第71図 27-OD出土遺物

特に外方に突出する。151は縦方向に断面保方形、U字形の把手が左右につく鉢形土器である。把手外方側中央には刺突文が縦方向に並ぶ。

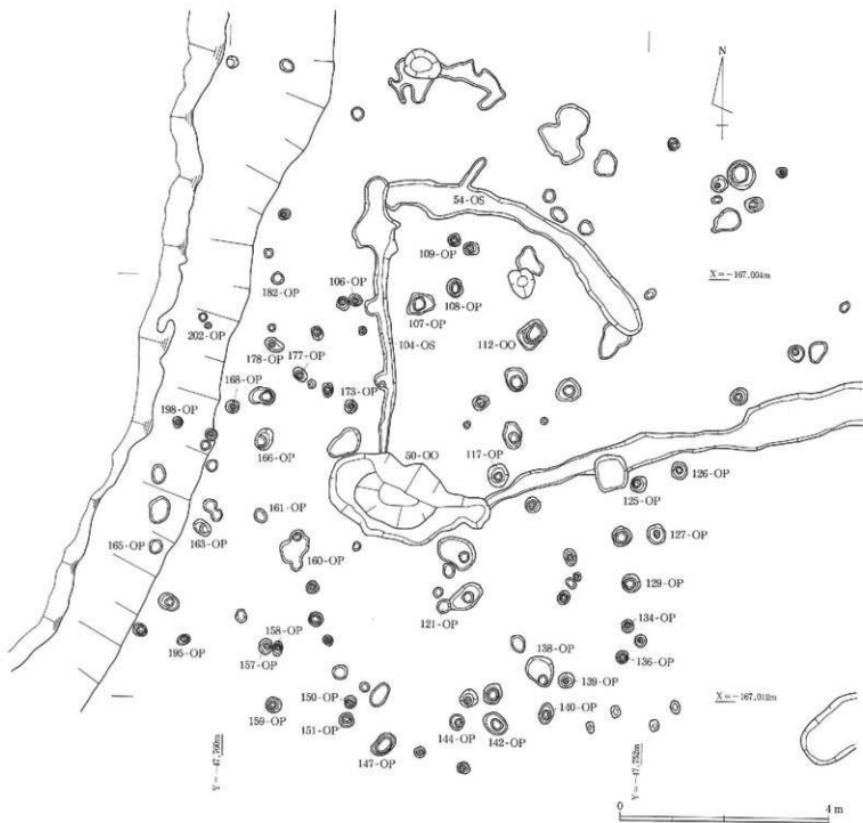
体部は上部が丸みをもってはり、口縁部は外方につまみ出すようにして外湾し、端部はとがる。152は径7.0cmの壺形土器の底部と考えられる。色調は灰・淡黄色が基調で、151のみにぶい赤褐色である。胎土は緻密である。

時期は畿内第III様式中ごろであろうか。

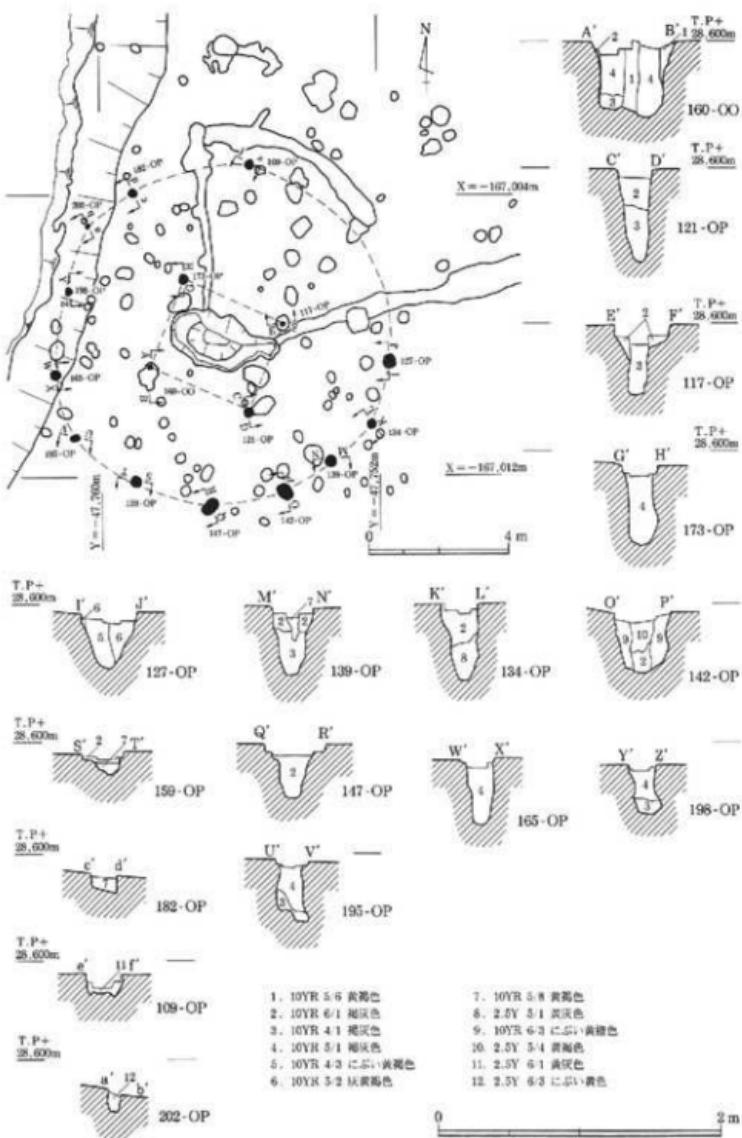
ピット群 (第72~76図、図版45)

その6の調査区の中央やや西より、谷状遺構から3mほど離れて、径12mの範囲にピットが集中する。堅穴住居27-ODの遺存具合やその2・C地区3-ODのピットの多さから考えて、堅穴住居と考えても差し支えないだろう。また、谷状遺構側に幅40cmほどで径6mに円弧状にまわる小溝もあり、その中央には炉と考えられる55-OOも存在することもそれを示唆する。

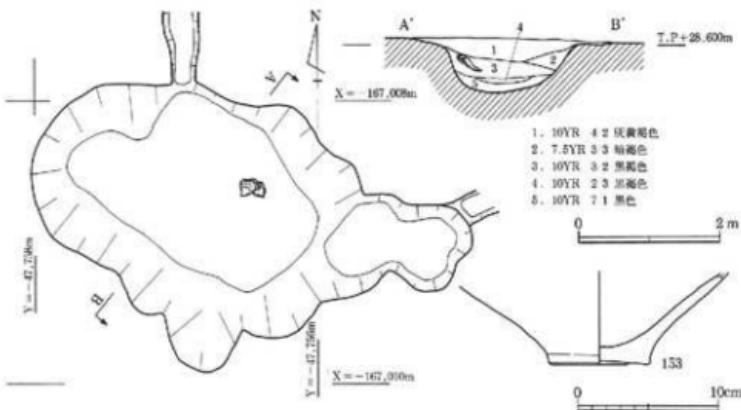
以上のことから、ピット群は住居を構成すると考え、それらの組み合わせから少なくとも700・701・702-ODの3棟分の重複を復元できる。



第72図 Pit群 (700~702-O-D) 造構配置概略図 (1/80)



第73図 700-OD平面図・Pit断面図



第74図 50-O O平・断面図、出土遺物

700-O D (第73・74図)

径9.6mで周縁をめぐるピットとして、109・182・202・198・165・195・159・147・142・139・134・127-O Pの計12個のピットで構成される住居跡と思われる。これらのピットの特徴は、比較的大型で深いものが多く、最大で径40前後、深さ100cmの掘形を持つものがある。埋土は黄褐・黄灰・褐灰色土を基本とする。西側のピットは上部を8-O Sに削平されているため本来の形状や深さは不明である。

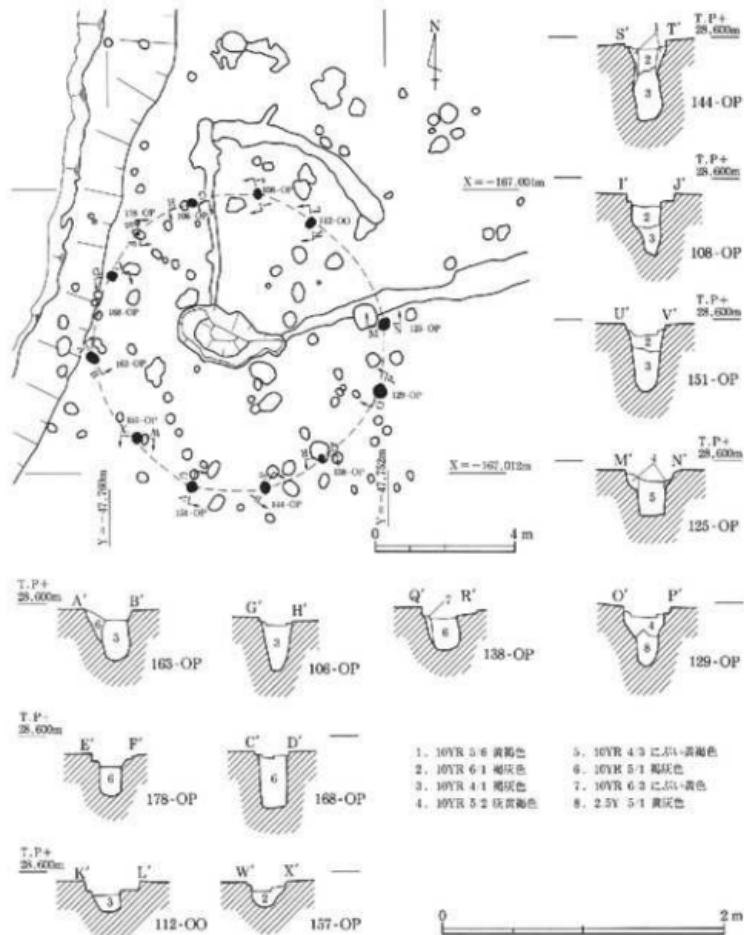
住居跡のほぼ中央には長径50、短径35、深さ80cmの不定型な椭円形を呈する炉50-O O(第74図)がある。断面はU字形で黒色・黒褐色土を下層埋土にもち、下層から底径7cmの壺形土器の底部(153)が出土した。153は残存器高6.5cmで外面にはケズリが見られるが多くは外内面とも剥離が著しく不明な部分が多い。炉からは北側と北東側に延びる排水溝と思われる溝が見られ、この炉を囲むようにして117・121・160・173-O Pが3.2×2.6mの方形に4ピットが並ぶものと思われる。住居跡の北側には円弧状に回る溝が確認された。

701-O D (第75図)

径8.5mで周縁をめぐるピットとして、144・108・151・125・129・138・106・163・178・168・112・157-O Pの計12個のピットで構成される住居跡と思われる。

この住居跡の特徴は、700-O Dに比べ南西に全体がより、ピットは径30、深さ60cm前後の掘形で、埋土は同じく黄褐色・黄灰・褐灰色土を基本とする。

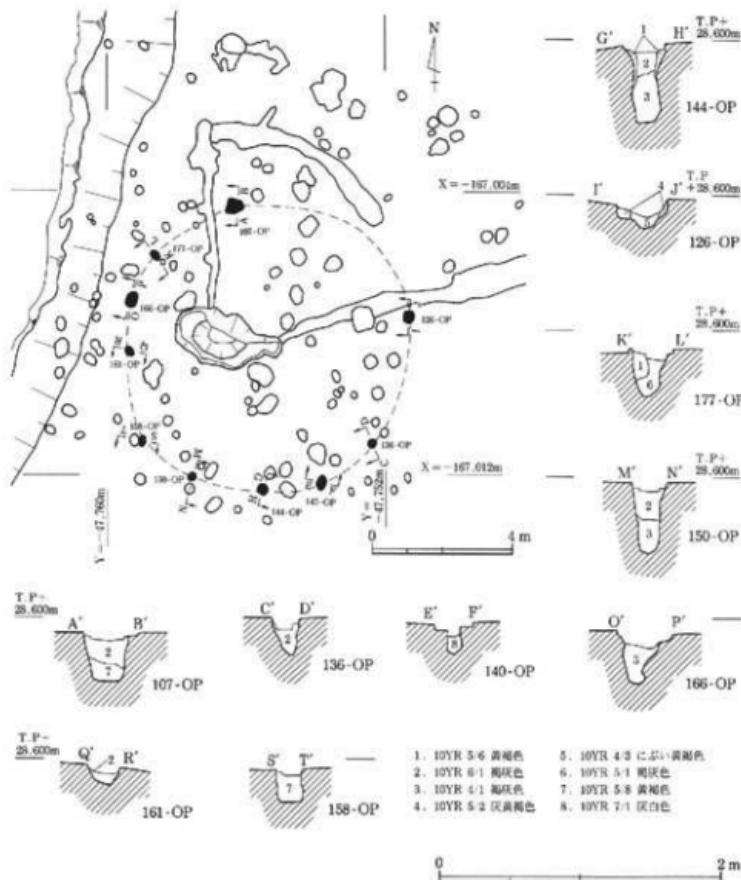
700-O Dで確認された50-O Oの炉が東西方向に長軸を持つことから、やや西側に拡張しこの住居跡でも使用されていたのではなかろうか。



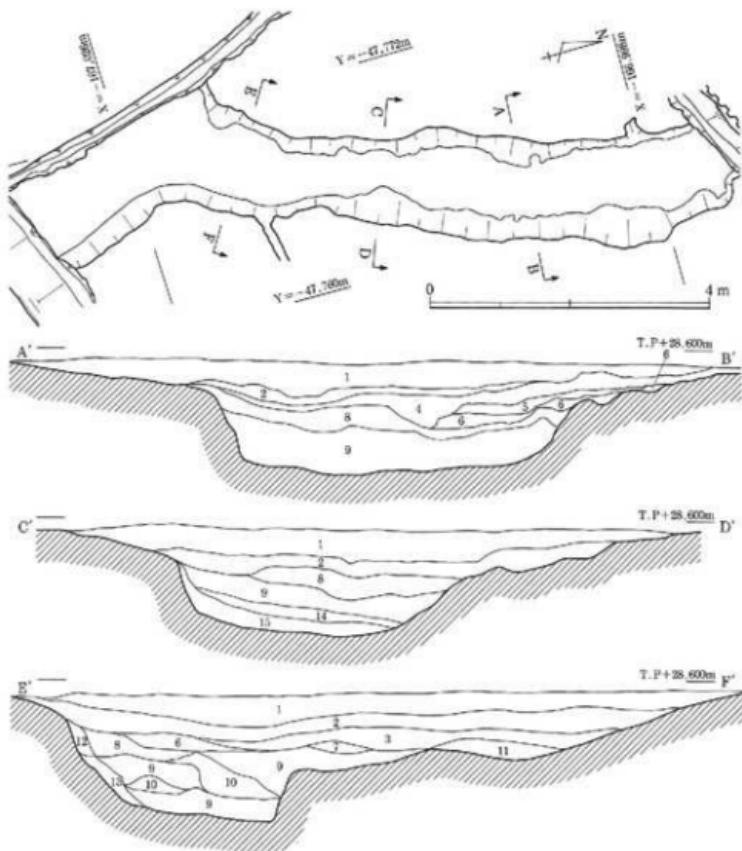
第75図 701-O D平面図・Pit断面図

702-O D (第76図)

径8.4mで周縁をめぐるピットとして、144・126・177・150・107・136・140・166・161・158-O Pの計10があり、これらの特徴は、700-O Dに比べ南東により、比較的深い径30、深さ50cm前後、埋土は黄褐・褐色土を基本とする。



第76図 702-O D 平面図・P i t 断面図



- | | |
|----------------------|-------------------------------------|
| 1. 10YR 5/3 棕褐色 | 9. 10YR 4/1 墓灰色(上部に7.5GY 6/1 緑灰色含む) |
| 2. 10YR 4/6 墓色 | 10. 7.5GY 7/1 明棕灰色 |
| 3. 2.5GY 4/1 地オリーブ状色 | 11. 10Y 7/1 墓白色 |
| 4. 10YR 4/4 墓色 | 12. 5Y 6/2 反オリーブ色 |
| 5. 7.5Y 5/2 墓オリーブ色 | 13. 5GY 7/1 明オリーブ灰色 |
| 6. 7.5Y 4/1 墓色 | 14. 2.5GY 6/1 オリーブ灰色 |
| 7. 5Y 5/1 墓色 | 15. 7.5GY 5/1 緑灰色 |
| 8. 10YR 5/6 黄褐色 | |

第77図 8-O S平・断面図

8-O S (第77図、図版45)

溝8-O Sはその1・B地区とその2・C地区的溝群561-O Sと100mほど隔てて平行する関係でやや弧状を呈する。調査区すぐ近くの北方、東側にある谷と合流するものと思われる。南側の東肩部では北東方向にのびて谷の西肩とつながる幅0.15mの小溝38-O Sがある。

8-O Sの断面は上部が幅4.8、深さ0.4mの皿状になり、下より灰、オリーブ灰、褐、黄褐色と堆積する。下部は幅1.5~2.5、深さ0.5mの逆台形を呈し、下から緑灰・オリーブ灰、褐灰、黄褐、灰色の順に堆積する。

溝の開削は以下の出土遺物からすれば、溝群561-O S他と同様な7世紀前半であり、最終埋没は8世紀後半ごろとなり、150年は機能していたことになる。

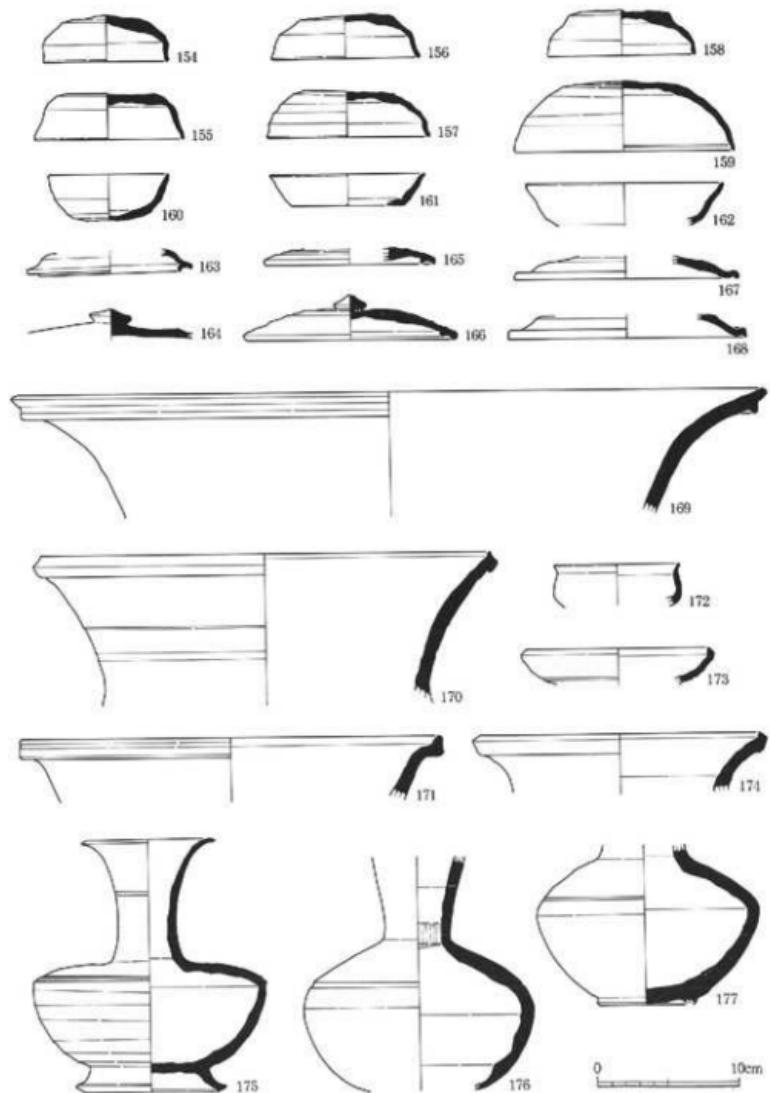
8-O S出土遺物 (第78図、図版58・59)

須恵器が多く出土しており、杯身・蓋、甕、壺がある。

154~159は、杯蓋になると考えられるが、154~158は口径が8.8~11.4cmと小ぶりで、特に156・158の天井部は調整があまく、155は平たいことから、一部は身になる可能性もある。159は天井が丸く、他に比べて口径15.6cmと大きい。全体に口縁部はヨコナデで垂直気味に屈曲する。160~162は体部が外方へ立ちあがる方向に口縁部が開く。口径は8.6~14.0cmとまとまらない。底部は160が丸みを、161・162が平たい。

163~165は宝珠及び擬宝珠が天井部につく杯蓋である。内面口縁部に返りがつく163・165・167と口縁部が水平方向に開いて端部が下方に屈曲する167・168に分かれる。

甕は口径54.0cmの大形の169と口径32.0・30.0cmの小形の170・173に分れる。前者は口縁端部が尖り気味に外湾しておわり、外面に突帯がつく。後者は外湾する口縁部に端部を上方につまみ出す。170の口縁外面は肥厚して下に段をもつ。壺には175~177の長頸のものと口径19.8cmの広口のものがある。前者はいずれも肩に沈線をめぐらし、少なくとも175と177には高台がつく。175は中でも最も肩がはるもので口径9.7、体部径16.5、器高8.5cmの大きさで、頭部にも沈線がつき、そこから大きくラッパ状に口縁部がひろがる。高台は大きく開いてふんばるもので、端面外側が外方にとびでる。純の可能性があるものに172と173がある。口径は9.0と12.9cmである。前者は丸みのある体部に外湾してつまみ出して尖る口縁部がつく。後者は体部から全体に内湾し、端部は上方につまみ出す。全体に色調は灰・灰白色を基調とし、胎土は緻密である。7世紀代のものが主体であるが、8世紀後半のものまで含まれる。



第78図 8-O S出土遺物

12-O X (第79・80図、図版46~48)

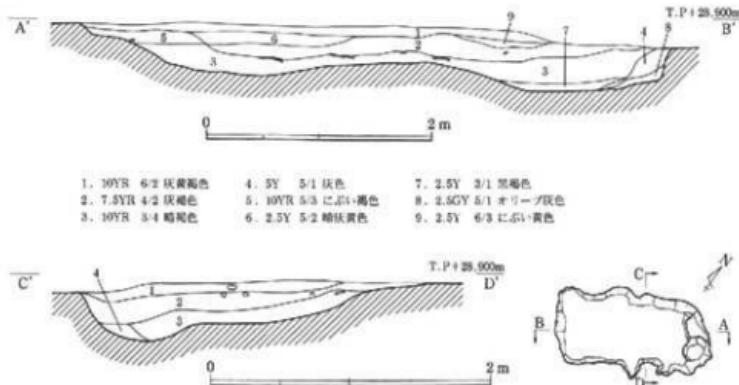
その6の南西に位置する不安定な北東-南西方向の長方形の落ち込みである。底面の方も安定せず、全体に西側へ傾斜する。上層は灰黄褐色を基調とし、下層は暗褐色、最下層は深いところから法面沿いにオリーブ灰色、灰色、にぶ黄色と安定しない堆積である。下層上面で須恵器を中心とした遺物が集中する。これらは落ち込み底の深くなるところをさけ、主軸よりやや西にふって大甕を一列にし、それを中心に各遺物がおかれた可能性がある。

12-O X出土遺物 (第81~85図、図版59~63)

この落ち込みからは須恵器が中心に、弥生土器も出土する。須恵器の器種は杯身・蓋、魁、カップ形(203)、高杯、壺、甕がある。

杯は、口径11.5~13.1、器高4.1~5.5cmと比較的大きさがそろったものある。178~186の蓋は体部が高く天井部との境にはするどく突出した縁がつき天井に丸みがある。口縁端部は面をもち、水平な179・181~183・185・186のものと内傾するものがある。187~196の身も、蓋に合わせた法量で、口径9.8~11.2、器高4.7~5.5cmである。立ちあがり部は高く、蓋受け部は端部を鋭く仕上げ、内傾気味のものが多い。

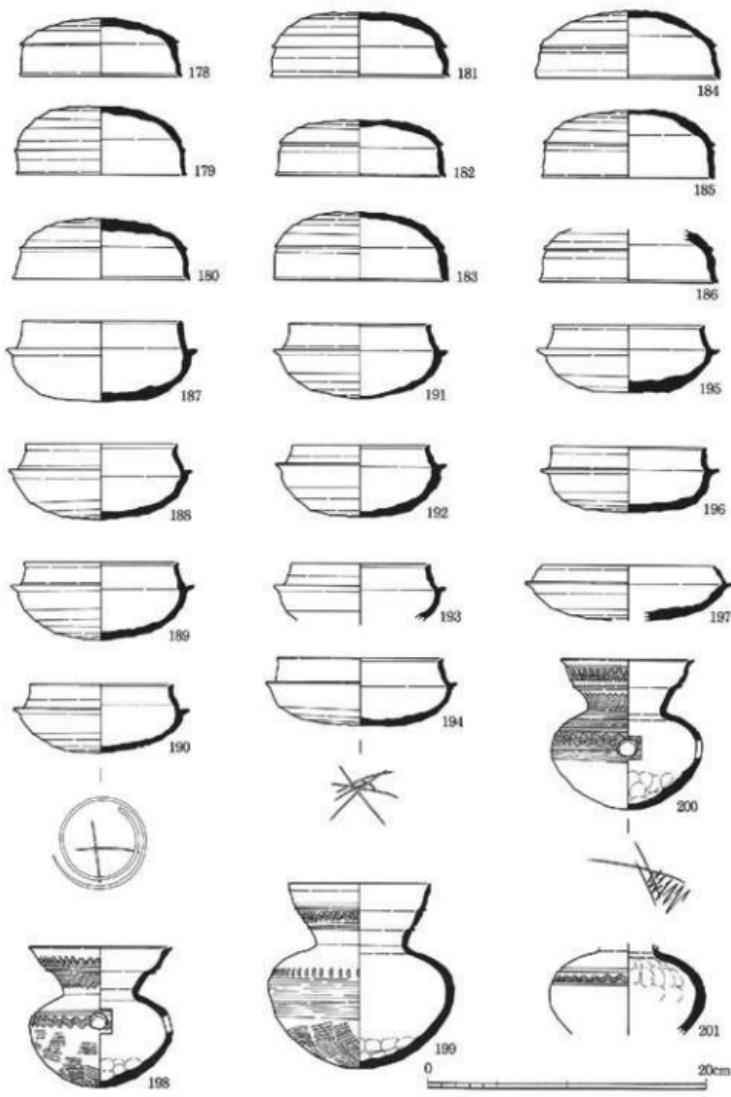
魁には206の樽形と198~202の壺形がある。前者は筒状のものを横置きにし、縦方向に2条の突帯で区切った文様帶をもつ。中央には組み紐状の櫛描文、左右には櫛描波状文がある。体部長は17.5cmである。後者は体部肩部に帯状に文様帶をもち、198・200・201に



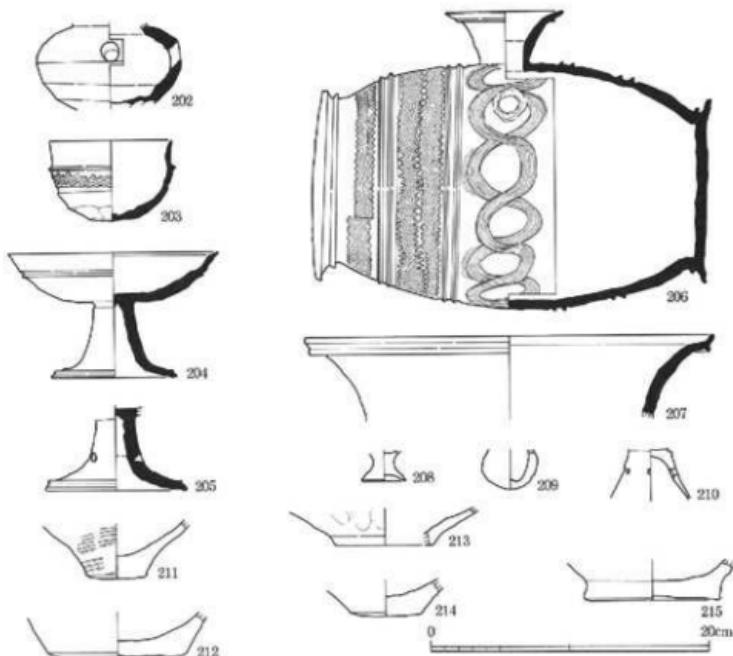
第79図 12-O X断面図



第80図 12-O-X平・立面図



第81図 12-O X 出土遺物 (1)



第82図 12-O X出土遺物(2)

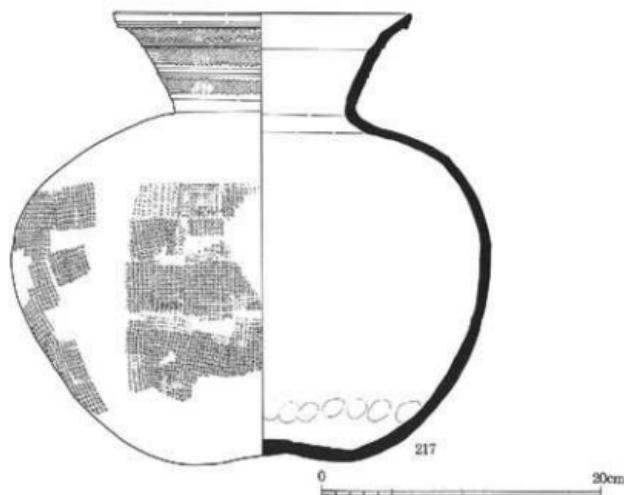
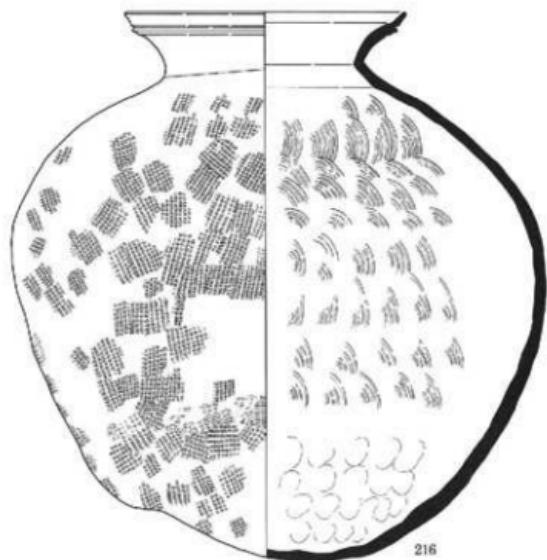
は櫛描波状文、199には刺突文がある。198~200には頸部、201には口縁部にも櫛描波状文がつく。また、無文の202もある。

204・205の高杯は無蓋のもので、大きく開く鉢形の体部に1条の突帯をめぐらし、段をつける。脚部は裾で大きく開き、端部外面に突帯がつく。205には円形の3方透かしがある。

207・217・220の壺は直口のものである。217・219は頸部に突帯と櫛描波状文を施す。

216・218の甕は口径20.1・30.0cmの大きなものである。調整は外面に218が平行タタキ、216・217・219が格子目を施す。内面に216・218が同心円文、217・219がナデ消す。胎土は緻密で、色調は灰・灰白色を基調とする。以上の須恵器は、おおむね5世紀後半でも古いところを中心とするが、197のように6世紀後半のものも混入する。

208~215の弥生土器は小片が多いことから、下層からの巻き込みで甕・壺形土器の底部、高杯形土器脚部、小形壺形土器がある。畿内第V様式を中心としている。



第83図 12-O X出土遺物 (3)